

| | |
|-------------|---|
| 開催地名：岡山県岡山市 | |
| 開催日時 | 令和元年 11 月 11 日（月） 14:15～15:45 |
| 開催場所 | 岡山ふれあいセンター |
| 語り部 | 草 貴子 （宮城県仙台市） |
| 参加者 | 自主防災組織 約 150 名 |
| 開催経緯 | <p>自主防災組織によって課題は多種多様で、洪水時に避難場所が近所がない、要支援者の扱い方がわからない、自助で手一杯で共助まで気が回るはずがない、自主防災組織を結成したが何かから着手すれば良いかわからない、防災訓練を行っても同じ人しか参加せず知識の普及につなげていない、毎年複数回の防災訓練を実施しマンネリ化に頭を悩ませているなど、様々な課題を認識している。語り部のお話を、今後の防災活動に活かしたい。</p> |
| 内容 | <p>（１）仙台市初の女性だけの町内会</p> <p>災害は世界中どこでも発生する。私自身、こうして東日本大震災のお話をさせていただいているが、昭和 61 年 8 月に集中豪雨によって実家が山津波に流されたという経験がある。その時の経験が、私自身が町内会の設立や防災活動に力を注いでいることにつながっており、平成 20 年 4 月に、以下の 3 つのスローガン掲げて、役員全員が女性の町内会を設立した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ①地域住民相互の連帯と協調と主体性を持つ町内会 ②子供たちの健全育成支援とふるさとづくりを実現する町内会 ③災害、防災には適切に対応支援活動ができる町内会 <p>発足 11 年を迎えた今でも、役員はすべて女性である。オール電化の集会所を建設し、防災講話や防災訓練も定期的実施してきた。</p> <p>（２）震災をふまえての活動</p> <p>地域防災支援組織の実情として、理念のみでは行動が伴わないことや、情報機能が麻痺していたこと等を痛切に感じた。それらの反省をもとに、市名坂小学校校区に新たな枠組みとして、総務班、情報広報班、救援班、食料物資班、衛生班、女性コーディネーターの 6 つの班構成からなる避難所運営委員会を設立した。万一の災害時に、地域住民は何をするべきなのか、という認識を強く持てるよう、より実践的な施策をもとに、議論を重ね、「いざ」に備える必要がある。また、物質的な援助だけでなく、メンタルな部分もケアできる体制を目指している。もう一つ、この運営委員会の特色として、女性コーディネーターの活用があげられる。平日の日中も地域にいる女性たちは地域の顔がよく見えるので、声をかけやすい雰囲気づくりの一助となりえるし、相談者の気持ちをくみ取りながら、</p> |

豊富な経験から暖かいアドバイスも可能である。女性ならではの視点を大いに活かして活動することの重要性を、東日本大震災から学んだと言える。

(3) 震災後の取組み

震災後は上記の避難所運営委員会の設立の他に、仙台市泉区内会長連絡委員会を発足するとともに、泉区内SBL（仙台市防災リーダー）相互連絡会を発足して年2回会議を開催したり、町内会祭りにあわせて防災訓練の実施や手づくりの防災便利マップの作成等、その取組はますます広がっている。専門的な知識もさることながら、お互いが知恵を出し合って、完璧な答えを出せないとしても、その過程を大切に、少しでも前に進めていきたいと思っている。

お父さんにはお父さんの、お母さんにはお母さんの役目があり、人は誰でも一人一人尊い役目がある。また、男性だからとか女性だからとかでなく、私の役目、あなたの役目、皆違って当然である。地域防災の大事なことは、自分たちの特性を考えて、オリジナリティーのある身の丈にあったものを実践していくことだと考える。災害はいつ、どんな時に発生するかわからない。いかなる時も自分を信じて、自分の役目を果たして、希望の光を見るまで歩いて行きたい。

また、災害や減災を考えていくと、行きつくところは「健康な体」の大切さである。逃げるにも、避難所での生活でも、体が丈夫だと支援の手伝いが可能だし、アドバンテージとなる。健康な体を保っていただければと思う。



開催地より

自主防災組織に関すること、避難所運営に関することを、東日本大震災での実際の体験談をふまえてお話いただいた。市の防災活動の参考にさせていただきたいと思う。